

平成三十年度 入学試験問題

国 語

第二回

【注 意】

- ・ 試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・ 問題は一ページから七ページまでです。
- ・ 解答はすべて解答用紙の解答らんに記入してください。
- ・ 字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・ 解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

(1) 世の中のことながらが何でもうまく分類できるとは限りません。必ず、「これはどっちに入れたらいいかな？」と迷うような、境界線上にあるものが出てきます。

例えば、カレーパンを考えてみましょう。カレーパンはパンであると同時に、その内部にはカレーが入っています。パン屋で売られているので「パンである」と分類できます。しかし、その味はどう考えてもカレー味です。それなのにカレーに分類されないもおかしな話です。

それではと、「パン」「カレー」という分類の他に、新しく「カレーパン」という分類項目を増やすとしましょう。そうすると、こんどは焼きそばパンやアンパン、クリームパン、ジャムパンなどと、続いて増やすべき分類項目がどんどん出てきます。分類とはいくつかのものをまとめて一クカクに入れることですが、これではどんどん区分けが細かくなって、分類する意味がなくなってしまいます。

つまり、境界にまたがっているもの、言い換えると、二つ以上の性質を持つているものは、そのどちらか一つに入れようとして、とたんに分類が止まってしまうのです。

もう一つ、「分類できないもの」の例として、⁽²⁾写真を整理することを考えてみます。今ここに、去年の夏、友人と山に登ってキャンプをしたときの写真があるとしましょう。この写真をアルバムに整理したいとすると、次の4冊のうちいったいどれに含めるべきでしょうか？

- 友人
- 山登り
- キャンプ
- 去年の夏休み

このように、一つのことながらが二つ以上の分野にあてはまるとき、「分類してどこか一つの棚に収納する」という方法は使えません。どこの棚に入れてもいい場合に、どれか一つを選ぶルールがないからです。

ということから、「ことながらを分類して収納」するよりも、「しっかりと全体像を見える」ことの方が、「わかり方」としてはより基本的なはずです。

ものごとは、一步離れて遠くから見れば全体を見渡すことができます。

30

25

20

15

10

5

しかし、単に全体を眺めただけでは、そこにあるものごと相互のつながりが見えないので、わかったことにはなりません。では、結局「わかる」とはどういうことか？ 私の考えでは何か「わかる」とは、ものごとの相互関係が見えている状態だ、ということですね。

私たちが何か「わからない」ときはどんな状態にあるのでしょうか。単にその言葉の意味を知らないだけ、という単純な場合は意外と少ないものです。そうではない、よくある「わからない」例は、「言葉の意味はまあわかったとして、だからそれがどうしたっていうの？」という疑問が残っている状態です。

⁽¹⁾ テンケイ的な「わからない」話のパターンは、たいてい次のような疑問をもたらしめます。

- どうしてそんな話がこのタイミングで出てくるのか？
- どうしてこの人はそんなことをいつているのか？
- そんな話を私にして、何になるっていうのか？
- だから、結局のところ何がしたいのか？

これらはどれも、説明された個別のことからはなんとなくわかったが、全体として、それらがどう関係し合っていて、結論として何がしたいのか、それが見えてこないという状況です。

ある特定の分野に詳しい人が話をするとき、聞いている人には細かすぎで必要ない話題まで語ってしまい、かえって全体像がつかみにくくなる場合がよくあります。例えば、コンピュータや自動車に詳しい人にとって「初心者にわかりやすい説明をする」ということは、意外と難しいものです。初心者にはわからない細かな違いをずっとしゃべったり、逆に初心者には欠かせない基本の話題を省いてしまったり、ということがよくあります。

これは **A** よくいわれる「木を見て、森を見ず」状態です。自分が一本一本の木を詳しく知っているからといって、初心者にまでその木について詳しく説明する必要はありません。相手がそれを理解でき、さらに相手がその説明を必要としている場合だけ、詳しく説明すればいいのです。

「木を見て、森を見ず」ということははふつう、「木を見ずに森を見る」という意味で使われています。 **B** 目先の小さなことばかりにとらわれずに、もっと大きな全体像に目を配れ、ということですね。しかし、私は

⁽⁴⁾ このことばからさらに一步進むことが、「わかる」ためにとても重要だと考えています。それは、

60

55

50

45

40

35

「森という全体像を見渡したうえで、さらに一本一本の木それぞれが、まわりの木と互いにどういう関係にあるか」を知るということ。

C、森の中の一本のクヌギの木を考えましょう。このクヌギの木は、まわりのたくさん木と影響しあいながら生きています。去年に枯れて倒れた別の木が、クヌギの木の根もとに寄りかかっているかもしれない。隣にあるもつと大きな木に日光をさえぎられて、クヌギの木は毎年ちょっとずつ日当たりが悪くなっているかもしれない。逆に、薄暗いところが好きなシダのようなシヨクブツは、このクヌギの木の下で元気に育っているかもしれない。また、根もとの地面には、クヌギの実がたくさん落ちて、小さな芽が出てきたところかもしれません。

この例のように、単にクヌギの木一本から、それを取り囲む周囲とのつながりにまでシヤを広げると、そのクヌギの木が持つ意味がより鮮明になるのです。理解しようとしていることが、他とどうつながっているか、どういう関係にあるかは、それを「わかる」ために非常に重要です。

D、そういうつながりを無視して一部分を切り取ってしまうことで、理解が難しくなることはよくあるのです。この切り取りや分解はまさに、西洋科学の基本的な考え、還元主義そのものです。

西洋科学を中心とした「還元主義」は何でも分解してしまうため、ものごとをつきつめていく専門家にとって、強力な「ブキ」となります。一方で、一般の人々は「細かい話はいらさないから、とにかく全体像を理解したい」は、必ずです。そのような場合、何でも分解しすぎてしまう「科学」は、わかりにくくなって当然なのです。何かを「取り出す」とは、「全体の中でどういう関係を持ちながらそこにあるか」という、理解に不可欠な情報を捨ててしまうことなのです。

(梅津信幸 『伝わる！』 説明術)

問一 —— (1)「世の中のことがらが何でもうまく分類できるとは限りません。」とありますが、それはなぜですか。解答らんに二行以内で答えな

れ。

問二

—— (2)「写真を整理すること」が、「分類できないもの」と言えるのはなぜですか。次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 分類するための区分けがどんどん細かくなってしまい、そのことからの評価が下がってしまうから。

イ 一つの写真が二つ以上のアルバムにあてはまるとき、コピーして入れなければならぬから。

ウ 複数の区分けのどれにでもあてはまるため、どのアルバムに入れたらいいか分からないから。

エ 写真に写った友人も山登りもキャンプも自分の大切な経験なので、どれか一つを選ぶルールがないから。

問三

—— (3)「木を見て、森を見ず」状態」とありますが、どのような状態ですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問四

—— (4)「このことばからさらに一歩進むことが、『わかる』ためにも重要だ」とありますが、筆者はどのような状態が「わかる」状態だと考えていますか。解答らんに合うように、本文から九字で抜き出さなさい。

九字 を理解できている状態。

問五

—— (5)「科学」は、わかりにくくなって当然」とありますが、なぜですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問六

A D に当てはまる語を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア つまり イ まさに ウ たとえば エ 反対に

問七

—— (ア) (オ)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 去年の夏、友人と山に登ってキャンプをしたときの写真を分類する場合、自分と友人とでは、印象も記憶も全く異なるため、二人とも納得できるようなアルバムに分類することは不可能である。

イ 人間が何かの説明を理解できないというのは、言葉の意味自体を理解できないという状況よりも、ものごとの関係性や、結論として何が正しいのか、なかなかつかめない状況の方が多いものだ。

ウ ある部分はカレーの味がしたり、ある部分はパンの味がしたりするカレーパンのように、その時々に応じて性質が変化してしまうものが存在するため、世の中のことがらが何でもうまく分類できるとは限らない。

エ コンピューターや自動車に詳しい人にとって、聞いている人には細かすぎて必要のない話題こそが最も重要なことであるため、初心者には欠かせない基本の話題を省かなければならなくなる。

2 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「お兄ちゃんとお父さんが住んでいるところはどのへん？」

「この電車の終点、外川駅の近くだよ」

そこは 銚子の町よりさらに辺鄙なところだが、ふたりが越してくるなら住み替えるという奥の手もある。もともとなぜ漁師町にあるアパートを紹介されたのか、さっぱりわからない。

電車は時刻表通りに発車して、のどかな田園地帯を走り、八つ目の犬吠駅で降りた。時間にしてたったの十五分だ。ここがもう、駅前には何も無いところで、母の顔を気にしながらさっさと道路を渡った。最初に連れて行くのは犬吠埼灯台だ。

ぼくは覚えてたの、蘊蓄を披露し、明るく元気にガイド役に徹した。幸い、天気も味方してくれた。十一月にしては暖かい日で、空には薄雲が広がっていたものの、徐々に切れ間が増えて灯台の上に上る頃には陽が注いだ。太平洋の眺めはなかなか素晴らしい。

ぼくは母に佐丸の話もした。初めてできた友だちであり、いろんなところを案内してくれた気のいいやつだ。もしかしたら東京のどの友だちよりもウマが合うかもしれない。宮本は人が良くて、根っこの部分がほんとうに優しい。

よかつたわねと、微笑んでくれるのを期待していた。父のように目を潤ませるとは言わないまでも、喜んでくれるにちがいないと思っていた。横から話を聞いていた妹でさえ、お兄ちゃんすごいね、もう友だちができたんだねと、見直すように目を輝かせた。

でも母は、曖昧に (3) を傾げるだけだった。意味がわからずストレートに尋ねた。

「ぼくに友だちができたの、喜んでほしくないの？」

「そうじゃないわ。元氣そうで安心した。でもフミくんは昔から好かれる子だったじゃない。友だちはたくさんいたでしょう？ 誰だってフミくんみたいな子とは友だちになりたいのよ。思いやりがあつて、よく気がついて、勉強ができてひけらかさない。誰に対しても公平で意地悪しない。こつちの子だってフミくんに会えば、そりゃあ仲良くなりたと思うわよ」

そうだろうか。東京に、友だちはたくさんいただろうか。

「それにまだひと月でしょう？ 東京からの転校生が珍しいだけかもしれ

30

25

20

15

10

5

ないわ」

佐丸や宮本、川口、鴨沢、長谷部。次々に顔が浮かぶ。転校生が珍しくてかまってくれた？ そんな単純な話だろうか。それに、ぼくがほんとうに「好かれる子」なら、転校生の効果がなくなっても仲良くしてくれるはずだ。

もやもやしたけれどうまく言葉にできず押し黙った。母のしなやかな腕がぼくの肩を優しく包み、指先にきゅっと力が入る。

「フミくんはお母さんの自慢の息子よ。どこに行っても親切にもらえらるなんて、お母さんも誇らしい。いろいろ不自由のある中で、頑張ってくれたのね」

(4) これにもどう応えていいのかわからず、ぼくは困惑を隠し、銚子案内に戻ることにした。「地球の丸く見える丘展望館」からの眺めは素晴らしいけど、坂道が急なので今回はパス。昼食はこのあたりで一番の寿司屋に入った。エビもマグロも新鮮で美味しいと言ってもらい、気持ちがあ上を向く。犬吠駅に引き返し、一区間だけ電車に乗って終点の外川で降りる。レトロな駅舎の前では記念写真だ。

そこからは通っている小学校を目指した。斜面の中腹を横に移動していると、左手の路地の先に見える。斜面を下っていった先にあるのが港だからだ。風は冷たくなっていったが、家と家の間に水面が A と輝く。何度となく足が止まり、三人して見とれてしまう。

ひと月でやっと馴染んできた小学校を紹介し、続いて宮本の家に向かった。焚き火と焼き芋の話をして、左右に広がるキャベツ畑を眺めながらどり着くと、噂の庭に宮本がいた。行くかもしれないと、こっそり話を付けてあつた。気の毒に、B していたおかげで、物置の片づけをやらされる羽目になったそうだ。

母を紹介すると、宮本は芸能人みたいだと驚き、妹にも目を瞠った。一瞬の絶句のあと、あたふたと家の中に引つ込む。代わっておばさんが出てきた。濡れた手をエプロンで拭きつつ、サンダル履きで庭に下りる。

母は笑顔で浮かべて挨拶した。いつもお世話になっていきますとにこやかに会釈する。おばさんはお茶でもと誘ってくれたが、いえいえと手を振って遠慮する。ぼくは内心、母の提げている紙袋から菓子箱が出てくるのを期待した。

子どもが少しでも親しくなった人、あるいは世話になった人には、必ず

60

55

50

45

40

35

気の利いたものを贈る人だ。有名店のブランド菓子はもとより、パッケージのかわいい紅茶のセットだったり、庭に咲いている花のミニブーケだったり、手作りのジャムだったり。気恥ずかしくて持たされるのはいやだったけれど、相手はささやかなものでもとても喜ぶ。女の人だったら効果絶大だ。

だから、おにぎりやジュースをご馳走してくれるおばさんが、「まあ」と喜んでくれるのを期待する。 **C** する。(5) けれど今日に限って何も出てこない。短い立ち話だけで切り上げ、それではと母は会釈した。

宮本の家を辞してから、今度は佐丸の家に案内する。道々、紙袋に何が入っているのか尋ねると、ぼくの服だそうだ。すごく似合いそうなのをみつけたと。

それから服の話が延々と続く。どこその店が二号店を出したとか、あそここの店がカジュアルに力を入れてきたとか、バッグやスニーカーが変わったシリーズができたとか。ぼくは身につけるものに興味のある方だ。Tシャツやソックスにもこだわりがある。服を見て歩くのも、買うのも着るのも好きだ。

けれどこのときは、初めての釣りで取った魚の話や、慣れない包丁を手に、さばいてみての失敗談を聞いてほしかった。

佐丸は家の前の空き地で春を遊ばせていた。春の方が先に気づき、猛烈に尻尾を振ってぼくたちを歓迎してくれた。おつかなびつくりだった妹も、絶対噛まないと言われ、そばに寄って頭を撫でた。おとなしくて人なつこい春をたちまち気に入って、何度も名前を呼ぶ。

母は佐丸にも、あとから出てきた佐丸のお母さんにも、宮本の家同様、挨拶してくれた。佐丸のお母さんは「きれいなお母さんねえ」と、ぼくを小突く。

「妹さんもとってもかわいらしい。何年生？」

「今、三年生です」

母が答えた。

「いいわねえ。うちは女の子がいなくて羨ましいわ。こちらにいらっしやるご予定は？」

「それがまだはつきりしなくて」

「大人はいろいろありますよね」

「そうなんです。息子のことはもちろん心配なんですけど」

95

90

85

80

75

70

65

「うちではもう、隆弥も春もいいお友だちができて大喜びなんですよ。これからよろしくお願いします」

母親同士のやりとりの間、子どもたちは春を遊ばせていた。遊んでもらっていたのかもしれない。名前を呼びながら、 **D** 動き回る姿を見ているだけで、和やかな空気に包まれる。真つ黒な瞳にみつめられて頬がゆるむ。

佐丸親子と別れてから、いよいよ父と住むアパートへと連れていく。行かねばならない。

「このあたりにアパートは珍しいんだって」

何気なく言うと、母はため息をついた。

「ないところに、わざわざ探したのよ。不便なところに追いやられたの」

「どういうこと？」

「お父さんを追い出した人たちが、新しい職場の人たちに、犬吠埼の近くを頼んだみたい。本人の希望だと言って。そんなの嘘よ。お父さんは言っていない。でもこちらの人は真に受けてしまったのね。よかれと思つてのことかしら。それとも、こっちにもいやがらせをしたい人がいるのかしら」

母の言葉はぼくの心に砂袋を落とした。気持ち **E** 沈んでいく。同時に、ああそうかと合点がいった。外川は昔ながらの漁村だ。縁もゆかりもないよそ者が、移り住むような場所ではない。手頃な賃貸なら町中にもつとある。

「だったら引越せばいいよ。お父さんも言つてた。銚子市内にはもつと便利なところがあるって。アパートではなくマンション、ううん、一戸建てでもいいよね。お母さんや麻莉香が来てくれたら、もつとちゃんとした家に引越そう。待つてるんだ。ぼくもお父さんもずっと、ふたりが来るのを毎日待つてる」

ぼくは勢い込んで言つた。熱く力を込めて、今日一番の本音をぶつけたつもりだ。

「フミくん、マリちゃんの学校を変えるわけにはいかないわ。フミくんもなのよ。今からでもちつとも遅くない。入れる学校はたくさんある。フミくんがお父さんのために思つてついできたのは、お母さんにもよくわかっている。やっぱり男の子なんだなって、つくづく思い知らされた。お父さんもすごく嬉しかったと思う。一番心細いときに息子がそばにいてくれたんだもの。どんなに勇気づけられたか。でもね、これ以上はいいわ。フミくんが犠牲になることはない。なつてはだめ。もつと自分のことを考えて、

130

125

120

115

110

105

100

東京できちんとした学校に入りましょう」

(6)★渾身の一球が、難なく打ち返される。

「できれば年が明ける前に戻ってきてほしいの。今まで通りに家族揃ってお正月を迎えましょう。もちろんお父さんも一緒よ。こちらの学校に馴染んだなら、卒業まで通うのもいい。前の学校に、今すぐ戻ってきてても大丈夫。先生にはちゃんとお話をしてあるのよ。みんなも待っている。醤油工場の話も焚き火の話も、大喜びで聞いてくれるわ。お父さんも納得しているし。あの人ならひとりりでちゃんとやっていけるから」

(大崎梢『よつつ屋根の下』)

★蘊蓄……たくわえた知識。

★絶句……言葉が出ないこと。

★辞して……あいさつをして帰って。

★渾身……全身の力を出して。

問一 ——(1)「銚子の町よりさらに辺鄙なところ」とありますが、それにはどのような事情があったと母は考えていますか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問二 ——(2)「ウマが合う」とありますが、動物を使った次の一〜五の成句の意味を、後の「意味」ア〜オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- 一 犬も歩けば棒に当たる
- 二 豚に真珠
- 三 馬の耳に念仏
- 四 猿も木から落ちる
- 五 能ある鷹は爪を隠す

〔意味〕

ア 本当に能力のある人は、それを人に見せびらかしたりしないものだ。

イ どんな名人でもときには失敗することがある。

ウ どんなによい物でも、値打ちを知らない者には、役に立たない。

エ いくら言ってもきかせても、ききめがない。

オ 出歩いていて、思わぬ幸運にあう。

問三

(3)に入れるのにふさわしい漢字二字の言葉を答えなさい。

問四

——(4)「これにもどう応えていいのかわからず、ぼくは困惑を隠し」とありますが、「ぼく」が困惑したのはなぜですか。次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「ぼく」が転校してまだまもないうちから佐丸と友だちになることができたにも関わらず、単に転校生が珍しいだけだと決めつけられてしまったから。

イ 「ぼく」は、銚子で出会った友人や太平洋の素晴らしい眺めが気に入っているにも関わらず、母に不自由な生活だと決めつけられてしまったから。

ウ 「ぼく」は、銚子に引越してから母に対して誇れるようなことは何一つしていないにも関わらず、自慢の息子で誇らしいと決めつけられてしまったから。

エ 「ぼく」は、明るく元気に振る舞うことでようやく認めてもらえたのに、単に周囲の人たちが親切なだけだと決めつけられてしまったから。

問五

——(5)「けれど今日に限って何も出てこない。」とありますが、母が、銚子の人には何も送らなかつたのはなぜだと考えられますか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問六

——(6)「渾身の一球が、難なく打ち返される。」とありますが、どういうことですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問七

——[A] [E]に当てはまる語を次のア〜オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

- ア どんどん
- イ うろろうろ
- ウ わくわく
- エ きらきら
- オ ちょこちょこ

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母は、「ぼく」が父のためを思い、自分を犠牲にして銚子への赴任についてきたと考えており、もうこれ以上我慢する必要はないと考えている。

イ 妹は、「ぼく」が引越してからまだ間がないにも関わらず、たくさんの友だちを作った「ぼく」のことは見直し、自分も一緒に住みたいと考えている。

ウ 「ぼく」の友人である宮本は、人が良くて、根っこの部分がほんとうに優しい人物であり、「ぼく」が一刻も早く銚子になじめるよう学級で働きかけてくれた。

エ 「ぼく」の父は、自分の我儘で「ぼく」を銚子まで連れてきてしまったことを深く後悔しており、一刻も早く東京に帰らせたいと考えている。

